

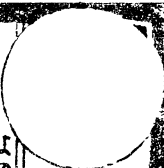
京傳戲作

通油町萬屋板

不憎入
系屑籠

亥春
新鐫
世と酒落見繪圖上





京傳戯作

通油町萬屋板

不憎
不憎

亥春
新鋪

上之酒落見繪圖

中



戯作

油町萬屋板

不憎
不憎

上之酒落見繪圖

下



洒落見繪圖序

洒落ること難し、黄山

谷がいはく、茂叔が胸

中洒落たること、光風

霽月の如しと、これら

が洒落といふものか。

當世の洒落は洒落に非

ず、猶廡下の扁螺の房

堂上の猫兒の尿の洒落

たるが如く、悉く皆本

意を失ひ、且行き過ぎ

て頭を前の十字番の檻

洒落見繪圖序



洒落難矣黄山谷云茂叔胸中

洒落如光風霽月此洒落乎當

世之洒落非洒落猶廡下扁螺

房堂上猫兒尿之洒落乎悉皆

失本意且行過而及觸頭於前

十字番檻也於戲洒落難矣

山東京傳識于菊亭



山東京傳菊亭に識す

爰に繪草紙の
 作者京傳とい
 ふ者、例の無
 益の事に案じ
 入つて、獨り
 机にもたれ居
 たる折節、草
 庵の前を洒落
 見の繪圖く
 と呼んで通り
 ければ、京傳
 はたと手を打
 ち、ア、つらくおもんみれば、
 世の中の人心かうでもない、
 あゝでもない、無性に洒落々々
 してみた所の末は、如何なるもの
 になるやらんと獨りつぶやきしが、

風鈴の音で
 夜蕎麥賣を知り、
 笛の音で按摩と知るは
 昔の事、今は人差指を曲げて見せると、
 質をおくことゝ悟るは成程洒落た世の中だ。



親爺
 も洒落
 れば息子
 も洒落る
 娘も洒落れば
 乳母も洒落る、
 しやれてく
 洒落見の繪圖く。



即ち一つの趣向となりければ、嬉しや
さらば書かんとて、筆おつとつて
よりかゝり、すでに草紙を綴りけりト、
それはさなきだ道成寺、
これは茶な氣だ、オ、
笑止サ。



おん
あばきやア、
べくろしや、
のうまかも
だら。

木魚の音に曰く
「ボク／＼／＼
タボ／＼／＼
タコ／＼
ひたこ、
あがつた
ら煮て食
はう。

古語にも天地一番の戯場（ぎやうぢやう）というて、芝居といふものはもと勸善懲惡（こんぜんちやうあく）の器なるを、何時しか大に洒落（しやれつ）て來て、見物も理窟（りこく）のある狂言よりは、目先の面白い狂言を喜び、樂屋落（がくらく）を嬉しがるやうになりければ、段々しやれくして今はや狂言は一向に止めにして仕舞ひ、舞臺で役者のうちをその儘正（しやうじやう）寫しにして見せければ、大入にて羽目（はすみ）をはづす。



世土洒落見繪圖

本舞臺三間の間（ま）

市川團十郎内のかゝり、

團十郎素顔不斷着の拵へにて、

俳諧の點をして居る。

本當の女房お龜

奥より出で、

このマア海老は何して居る

事ぞと案じるこなし、

トッどりや縫物にでも

かゝらうかトいふをきつけに

揚幕の内にて若旦那お歸りと

呼ばゝり、海老藏素顔にて

他所行の拵へにて升五郎に

手を引かれ、押上の

妙見詣りの

歸りの氣取りにて出れば、

見物がわツというて鳴り止まず。



「此次の幕は濱村屋の内ださうさ。已待て役者が招はれて来る所だ」と。

世洒落見繪圖

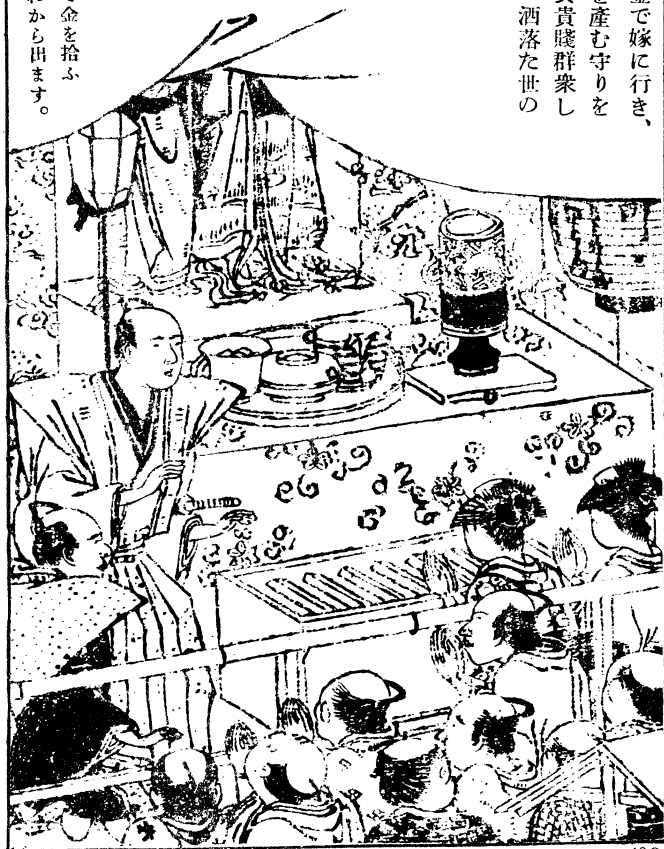
今時は、開帳なども信心で詣る者は
 少く、やれ水茶屋にいい娘が出るの、
 取持に役者が出るのといふ評判をきき、
 それを見に参詣する事なれば、
 畢竟本尊は有り甲斐なしにて、
 無くても済むものと、これらも
 大洒落に洒落て来て、本尊は
 かたから止めにし、正面に
 美しい娘と色男を立たせ置き、
 又靈寶はまだない〜というて、
 これも止めにし、又愛敬の守りや
 運の守り位はまだな事と、
 女郎買に行くと初會から
 惚れられて、あつちから
 身上りをしてよぶ守りや、
 富をつけると一の富二の富
 突きどめまで一人でせしめる

昔なら
 親子連れでは遠慮なれど、
 そこが洒落た世の中ぐつと
 平氣なものなり。



守りや、百兩の仕度金で嫁に行き、
お妾に住んで御世繼ごよつぐを産む守りを
出しければ、老若男女貴賤群衆し
て參詣する。何とマア洒落た世の
中に非ずや。

「轉んだ所で金を拾ふ
守りもこれから出ます。」

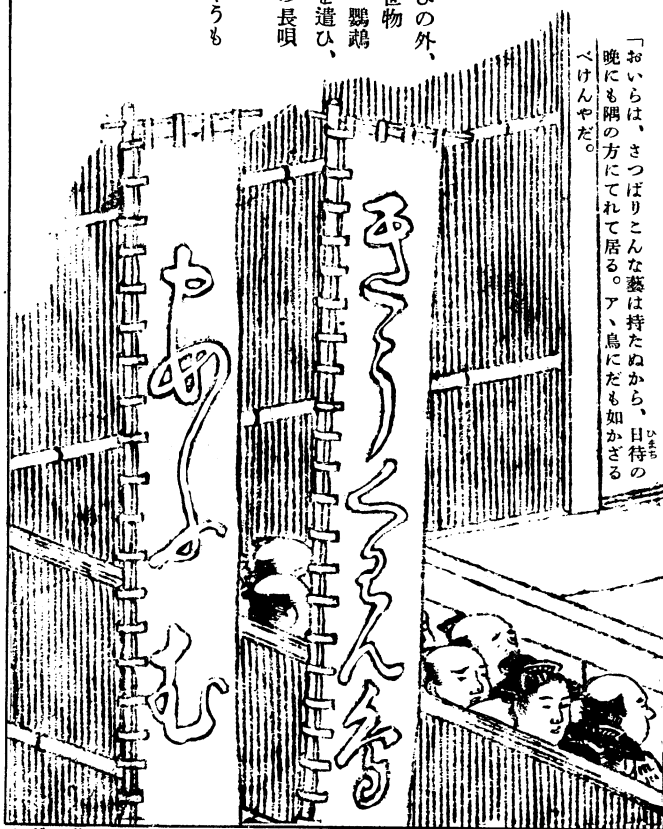


世土洒落見繪圖



猿の藝や
 狎の輪漕り、
 鼠が姉様を
 咥へて来る
 なぞは古けれども、
 葺屋町の河岸で蝙蝠の
 輕業、近年の洒落と思ひの外、
 そんな事ではなく、見世物
 なぞも段々洒落て来て、鸚鵡
 が三芝居の役者の聲色を遣ひ、
 九官鳥が座かゝり荻江の長唄
 をうたふ見世物が出る。
 なんとマア此上の洒落やうも
 あらうか。

「おいらは、さつぱりこんな藝は持たぬから、日待の
 晩にも隅の方にてれて居る。ア、鳥にだも如かざる
 べけんやだ。



世上洒落見繪圖

さるお寺の和尚、毎日々々地藏菩薩の
本堂建立の勸化に出でしが、本堂の足し
にはせず、うぬが鼻の下の建立や、

の建立にばかり遣ふ故、
本尊の地藏尊思ひ給ふは、
かういふ事では末々つまらぬ。

此上はいいらを
出さずにおれが
自身に出ようと、忝くも地藏尊自ら
勸化に出給ふ。されば今は佛も人に
助けられる世の中、
とんだ洒落た
ものなり。



「今迄うかくあいらを出して、無駄遣ひ
にされたのは、一生の地藏そんた。」

地藏様も我が口から
地藏菩薩本堂建立
ともいひ憎し、

又黙つて歩いては人が

知らぬ故、嫌なく私の
建立くはありが
てえね。

「昔ならから石の地藏
様が出歩いては、やれ
有難いの、絲瓜のと俗
物が騒ぐ場なれど、洒
落た世の中故平氣にて、
橋本町同然に思つて居
る。」

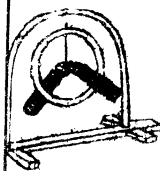
狐なども大洒落にしやれて来て、狐の方から鼠をかけて獵人を釣る。これらはどうか嘘らしいけれど、深川の壬生狂言や、髪結床の障子にも出て、最も確なることなり。かるが故に今は騒ぎの三味線にも、狐を浮かそ、こんくちきくこんちきちとはいはず、獵人浮かそかり人ちきくかりちきちと手おもく囃す。

狐曰く
「さてく獵人の洒落といふものは聞いて居られぬものだ。」

二百文とは

こいつ有難
やました
山下で鐵砲
が放せるわえと
獵人に似合つた
洒落をいふ。

「ア、からもあらうか。
見渡せばぐくと
小錢をこきませて
二百ぞ春の
二朱きなりけり。」



世酒上落見繪圖

狐は段々洒落て来て、
 生男を化かすは面
 白からず、とても
 化かすならよい女郎
 を化かして遊ぶが
 ましと、色男に化け
 女郎買に来る。
 女郎も又その上を
 大洒落にしやれて
 きつ印といふ事、
 承知で客にする。



「此引出へわつちが
 駒下駄を入れて
 置いたがおつせ
 んよ。」

「この客の箸紙へ夜の
 殿さんと名書して
 おくなどは洒落た
 ものなり。」

「今時の
 人間の
 客乗は
 甘い酢
 では
 いきん
 せん。
 それだか
 ら内證でも
 矢ッ張ぬし
 達の様な

「もしえ、そんなに遠慮
 しなんすな、主はこん
 こんだといふ事は、
 わつちもとうに承知で
 居んすけれど、はて
 おきつさんでも何でも
 客人に二タ色はおつせん。
 又この床花にお呉んなんした
 金も定めて木の葉で
 おつせうが、木の葉でも
 何でも金の通用さへすれば
 ようおす。
 主は全體律義だよ。
 矢ッ張これから白化けに
 來なんし。」といへば、
 流石の四ツ足も大に凹み、
 洒落には上手のあるものと
 感心する。



客人を
 嬉しが
 りんす。」

「コレ
 あの子
 や、この金の
 木の葉に
 ならぬ内
 早く質屋へ
 持つて行つて、
 先度の櫛と
 鏡を受けて來や、
 ちつと氣を
 利かせや、
 遅くなると木の
 葉になるぞよ。
 先で木の葉に
 なつた分
 にやア
 かまやア
 しねえ。」

昔は鳶が油揚げを浚ふとて、酒屋の御用の手を引掻きしものなるが、かゝる大洒落の世の中なれば、今は鳶も洒落て来て、そんなさもしい事はせず、肴賣の手前から三貫四貫する初鰯を高錢出して買ひ、雲の上にて飲みかける。その鰯の頭を人間が浚つて食ひはどうだ。

折節鳥刺來つて

これを見附けしが、寒鳶なら錢にもなるが、夏の鳶は五文にもならぬと、目はかけざりしが、鳶がよそ見をして居る

「ア、風邪をひいた。ちんく。」

「おれが身は、輕業師の煤掃といふものだ。竊て樽がちよいととまつて居るからよからう。」

「竿の先へすゝといふは聞いたが竿の先へ樽は新しい。」



所を見すまし、側にある
貧棒^{びんぼうだる}樽^づをちよいと
さしておつとる。

「然し酒を買つて

尻切^{しりぎり}薦^{せん}は

ちと見^{けん}

徳^{とく}が悪^{あく}

くさ。」

「芝^{しば}の山の尻切^{しりぎり}薦^{せん}も

よびにやればいゝ。」



「今年はとんだ子^この多い
年だ。」

去る程に我勝^{われがち}に
洒落^{しや}て来て、
二三月時分^{しげん}から
まだ蚊^{ぶん}になりも
せぬ子^こ子^{かり}が出て
人を喰^くひ、
まだ鰻^{うなぎ}に成^な果^はせ
もせぬ山の薯^{いも}の
内^{うち}から蒲焼^{しんやき}にして
賣^うる新^{しん}店^{みせ}が出來^きる。

「山の薯^{いも}の蒲焼^{しんやき}店^{みせ}へ俗^{しやく}はあまり這^は入^いらぬが、
坊^{ぼく}様^{さま}は幾^{いく}人^{にん}も食^くひに來^きる。これ鰻^{うなぎ}の影^{かげ}富^{とみ}を附^つける
心^{こころ}意^い氣^きとの事^{こと}なり。



或は男が血の道の薬を飲み、
下戸が水雑炊を食ひ、こいつは洒落だらう
と嬉しがる。

「これは中橋のまき屋薬か、
ア、血の道の薬は野暮てねえ奴だ。」

「水雑炊は意気なものだ。
諸事この事だ。
甘いく。」

これで
おいらがやうな下戸と
餅を食ふ上戸と丁度
入れ合ふだらう。」

「呆れ返る程上りますよ。」



世洒落見繪圖

昔は泥坊も黒装束、目計頭巾なぞといふ甲斐々々しき出立なりしが、今は洒落てぢんぐ端折りに京草履、店者のしくじりが虎屋の五種香賣に出たやうな形なり。

昔は犬も泥坊と見ると矢鱈無性に吠えしものなるが、これも段々洒落て來て頭からは吠えず。

犬「これ泥州、今夜は饅飯いくつだ。

泥棒「五つばかりで負けてくれやれ。

犬「とんだ事を。おのしは氣が違つたさうだぜ。おれもこの町内ちやア相應に吠えて、

番太郎にも立てられる犬だア。おのしも又何處無宿何小僧と名の通つた泥州だ。

そんな茶化しをいはずと、もつと出さつし出さつし。」



ちつと
古いが
「わしは饅飯
やる氣ちやけれどさいく、
おめえ犬の性で吠えなさる。
犬の子さいく。猫の子さいく。」

此の犬なか／＼小癩なり。

どろ

「これさ頭、

さう吠えてくれちやア
わりイ。」と犬も泥坊も互に

如才はなし。

どろ「どろぞこれで不承して啼き止んでくりやれ。」
犬「なんでも十五よこさねえと直にわんだナ。
それよしか、
わん／＼。」

「貴様の先祖は
桃太郎に黍團子を
一つ貰つて、

鬼ヶ島まで供をした。それから見れば

五つても高い

ものだ。」

「桀狗吠堯といへば、人を吠えるがおいらが役だ。所を吠えぬからひねるだらう」と、

雷^{かみなり}なども洒落て

来て、人間が

やかましからうと随分小さく鳴り、

偶々落つこちた時は、その近所へ

義理をのべて天上する。

雷^{かみなり}の荷^に拵^{もて}へ米^{こめ}搗^うが仕舞つて歸る

やうな身なり。

「オ、雷殿か、御苦勞でござる。

いやはや今の夕立て暑さを取返しました。」



「雷^{かみなり}奴でござります。只今は
おやかましうござりましたらうご
お隣ではお留守さうに
ござります。」

「雷^{かみなり}めが御挨拶に参つた
とおつやつて下さりませ。」

「なか
律義^{りちぎ}なもの
なり。」



かくて京傳は、かの世の中の
洒落て來た草雙紙を中の巻まで
書き、末の工夫をして居る所へ、
草の戸を叩く者あり。

京傳きゝつけ、ハ、ア蔦屋の主では

無きか。草雙紙の作の催促なら

まだやう／＼申まで出來て、

下の巻が出來ぬぞやといへば、

いや／＼其やうな

者ではない、

我は去年も

汝が筆に

度々書かれたる

天帝なり。

こゝ開けよ

と宣ふ。

「羅月さんではないか、但し吉原の掛取か。
僧は敲く月下の門、おい／＼といへど叩くや雪の門
といふやうな風流な所ではあるまい。」

「手前のうちを天を尋ねたつちアやねえ。」

天帝^{てんたい}宣^{のたま}ひけるは、
 此處^{こゝ}は差詰^{さしづめ}汝^なが夢
 の内に現^{あらは}るゝ場所
 なれど、かゝる
 洒落^{せだ}の世の中に
 そんな古い趣向^{しゅきやう}と
 出^でかけては、凡夫^{ぼんぷ}
 等にすこたと
 思^{おも}はれるも残念^{ざんねん}故^{ゆゑ}、
 白化^{はくわ}けに來^きりしなり。
 さて汝^なこの頃世^{ころよ}の中の洒落^{せだ}たる
 草雙紙^{くさふうし}を作る事^{こと}を知^しつたる故^{ゆゑ}、
 洒落^{せだ}のとゞのつまりを見^みせん爲^{ため}
 來^きりしなり。早^{はや}くおれと一緒^{いっしょ}に



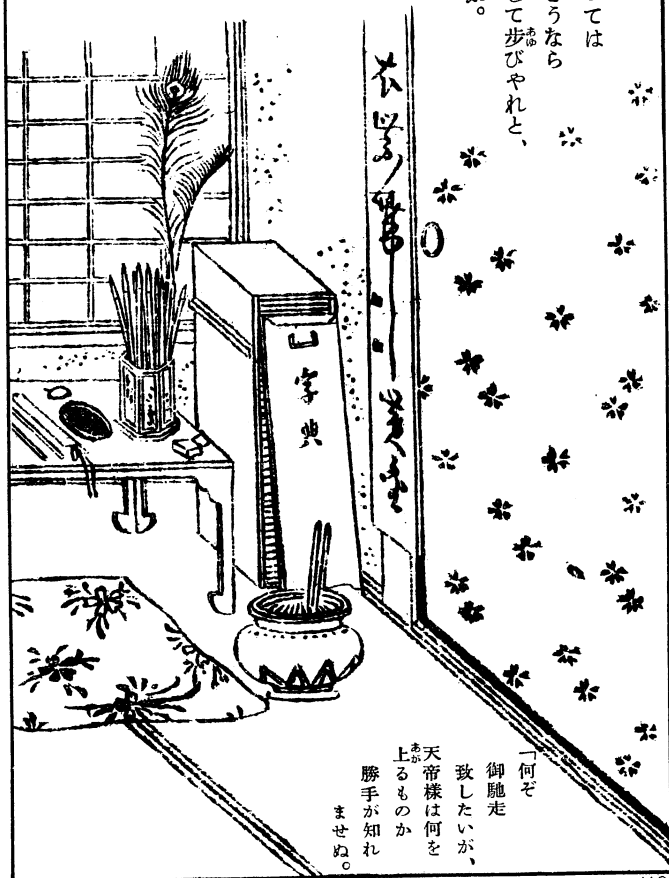
「去年^{まうとし}の惡魂^{あくたま}は
 大分^{だいぶん}受^うけ
 了^{しま}つた。」

よかつた。」

「今年^{ことし}も又^{また}惡魂^{あくたま}の後篇^{こうぺん}
 肝心^{かんじん}が一心^{いっしん}といふ
 本^{ほん}を著^あしました。
 御覽^{ごらん}じませ。」

歩^{あゆ}べ。

又見^{けん}物が夢だと思^{おも}つては
悪い^{わるい}から、もし睡^ねさうなら
とくとよく眼^めを覺^さして歩^{あゆ}びやれと、
天帝^{てんたい}戲^{おどけ}まぢりに宣^{のたま}ふ。



「何ぞ
御馳走
致したいが、
天帝様は何を
上^あるものか
勝手^{かたて}が知れ
ませぬ。

天帝は京傳を同道して何處ともなく
行きけるが、一つの海の端のやうなる
所へ出、そこを見れば、土にも
あらず、石にもあらず、木にもあらず、
如何にも朽ちたる一塊つゝになり
たるものいくつもあり。

天帝宣ふ。

是が皆洒落の高じた
ものぢや。此一塊つゝになつた

ものが、武士・百姓・職人・

商人・儒者・佛者

神道者・醫者・俳

諧師・藝者・幫間

その外色々の人
の洒落たのぢや。

中でもいつちよく洒落て居る

のが、通人と女郎の洒落たのぢや。

何とそれとは見えまい。かうでもない。



「是を柳橋の珍物茶屋か、兩國の
唐の開帳へ出したらどうて
ござりませう。とんと
金澤の蛇木といふもんだ。

次郎どんのいろと、
太郎どんのいろと、
みんな洒落て
仕舞つた。

あゝでもないど段々洒落々々して
 遂にはこんな分らぬものになる。
 今時の洒落は洒落ではなくて、
 皆行過ぎだから本意を失つて、
 このやうに初めの形を
 なくしてしまふ。
 無性に洒落たくと
 思つて元を忘れる輩が
 多いからかうだ。
 何と珍らしいものを
 見たらうと宣ふ。



たとへば海にある貝殻かひがらの洒落るやうなもので、はじめは榮螺さきまや鮑あわびの貝なれども、かうでもない、あゝでもないといふ潮しほに揉まれ、浪に打たれて、遂には何だか分らぬ形になつて、がら／＼一文／＼にほかならぬ。

人の事ばかりでもない。草雙紙なども餘り洒落ると本意を失ふ。

汝は洒落ぬと思へど、それ見るとて天帝の天眼の鏡にて見せ給へば、京傳がからだも段々洒落て來て、遂に朽木くちきのやうになる。

京傳曰
「人の事ばかり目くじら立て、おれは洒落ぬ／＼と思つて居たが、これは堪らぬ、もう半分洒落かゝつた。誰ぞとめて呉れ／＼。」



これはどうだ秀郷ひでさとと悪い洒落をいつたら、又半分洒落て來た。洒落が高じて物狂ものぐるひと、いつたらみんな洒落て仕舞つた。」

天帝「おれもとめて
やりたいが、
おれがにものども
仕方がない。
しやれての後の
御料簡さ。」



「過ぎたるは及ばざるが如しと
古語の通り、味噌の味噌臭きこそ
悪けれど、武士は武士臭く、
町人は町人臭きがよい。
洒落過ぎるとみんなさうだ。」

天帝つらく思ひ給ふは、これはつまらぬものぢや、
 何でもこの洒落た手合を元の通りの人間にせずば
 なるまいと、造化の神を集めて
 御相談の所へ、大千世界の切幕
 から暫く〜と聲を掛けて
 搖ぎ出でしは、柿の衣に
 鶴菱の袷袢を掛けて、
 水晶の大數珠をつま
 ぐりて、まだ草雙紙
 へは初舞臺の彌勒
 菩薩なり。
 洒落た手合を元の
 通りにするは、我らが
 受取り、サア〜我らに
 渡し給へと宜ふ。



天帝
 おれが相談
 の場所へ、
 暫くと聲を
 かけ
 けるは、
 普天
 の下、
 率土の
 うちに
 恐らくは
 無い筈だが、
 マア何奴だ。
 (一、引)

「當時繁昌北廓、青樓意氣八荒、天地てんつんの
營撫に浮れ出でたる大通佛。」

大千世界の花道の此方に安置し給へば、

一番待つてくれのかね、盆前のかね、

勤のかね、打ちに打つたる銅鑼鑓錢、

遠からん者は音にも聞け、近くは

寄つてみるく菩薩の御臺辭、

誰も根つから嬉しがらねば、

これを今に彌勒洒落損と申し奉る。

「京傳こんなつまらぬなりになつても、
氣ばかりは矢ッ張り強く、おんなじ
やうに何やつたエ、といふ。」

「我
を誰とか思ふ。
姓は慈、名は彌勒、
字は阿逸多、見知つて下せえ、
ア、つがもねえ。」



京傳作



かくて天帝は世の中を彌勒佛に渡すは
まだ十千億萬年じゆきやくまんねんも後の事。人間の風俗
斗はじりは直なほして呉りやれと頼み給へば、
彌勒佛受合みろくぶじうがひひ給ひ、かの洒落た手合を
集め、雛の古いのをこそぐるやうに

彩色をし直し、衣裝

をきせかへた人間は

即ちこの繪の通り

少しも洒落の無き

世の中と成り、若

やぐ春ぞ勿論洒落す

矢ッ張古風こふうに

目出度し。



「よいは」

著者主人画

此時

隅田川

渡守も

掛烏帽子を

着て舟を

漕ぐ。